

# 独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

—令和6年度—

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

## 目次

1. 外部評価委員会評価結果	1
2. 外部評価委員会評価報告	
総会	2
博物館部会	9
研究所・センター部会	13
3. 外部評価委員会委員名簿	
外部評価委員会全体	17
博物館部会	18
研究所・センター部会	18

令和6年度 独立行政法人国立文化財機構自己点検評価に対する外部評価委員会評価結果

中期目標大項目	中項目	小項目	自己点検評価	部会評価		総会評価		業務の まとめ	
I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	(1)有形文化財の収集・保管、次世代への継承	B	B		B		博物館	
				小松	B	名見耶	B		
				出川	B	小笠原	B		
				大久保	A	小松	B		
				笠原	A	藤井	B		
				平井	B				
		(2)展覧事業	A	A		A			
				小松	A	名見耶	A		
				出川	A	小笠原	A		
				大久保	A	小松	A		
				笠原	B	藤井	A		
				平井	A				
		(3)教育・普及活動	B	B		B			
				小松	B	名見耶	B		
				出川	B	小笠原	B		
				大久保	B	小松	B		
				笠原	A	藤井	B		
				平井	A				
		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	B	B		B			
				小松	B	名見耶	B		
				出川	B	小笠原	A		
				大久保	B	小松	B		
				笠原	A	藤井	B		
				平井	A				
(5)国内外の博物館活動への寄与	A	A		A					
		小松	A	名見耶	A				
		出川	A	小笠原	A				
		大久保	A	小松	A				
		笠原	A	藤井	A				
		平井	A						
(6)文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組	B	B		B					
		小松	B	名見耶	B				
		出川	B	小笠原	B				
		大久保	B	小松	B				
		笠原	A	藤井	B				
		平井	B						
2. 文化財及び海外の文化遺産保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施	(1)新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究	A	A		A		研究所・センター		
			藤井	A	名見耶	A			
			児島	A	小笠原	A			
			木下	A	小松	A			
			栗本	A	藤井	A			
			福岡	A					
	(2)科学技術を活用した研究開発の進展に向けた基盤的な研究	A	A		A				
			藤井	A	名見耶	A			
			児島	A	小笠原	A			
			木下	A	小松	A			
			栗本	A	藤井	A			
			福岡	A					
	(3)文化遺産保護に関する国際協働	A	A		A				
			藤井	A	名見耶	A			
			児島	A	小笠原	B			
			木下	A	小松	A			
			栗本	B	藤井	A			
			福岡	A					
	(4)文化財に関する情報資料の収集・整備に関する調査研究成果の公開・活用	A	A		A				
			藤井	A	名見耶	A			
			児島	A	小笠原	A			
			木下	A	小松	A			
			栗本	A	藤井	A			
			福岡	A					
(5)地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等	A	A		A					
		藤井	A	名見耶	A				
		児島	A	小笠原	A				
		木下	A	小松	A				
		栗本	A	藤井	A				
		福岡	A						
(6)文化財防災に関する取組	A	A		A					
		藤井	A	名見耶	A				
		児島	A	小笠原	A				
		木下	A	小松	A				
		栗本	A	藤井	A				
		福岡	A						
II. 業務運営の効率化に関する事項			B	—	—	—	法人共通		
III. 財務内容の改善に関する事項			B	—	—	—			
								名見耶	B
								小笠原	A
								小松	B
IV. 予算、収支計画及び資金計画			B	—	—	—			
							名見耶	B	
							小笠原	B	
							小松	B	
V. その他事項			B	—	—	—			
							名見耶	B	
							小笠原	B	
							小松	B	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（総会）

〔博物館業務〕

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承

自己点検評価 B 委員会評価 B

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	コレクションの充実が着実になされており、それらの活用も期待される。
小笠原委員	B	東博の浮世絵コレクションの寄贈受け入れや中国書画の継続受け入れといった特筆すべき成果があった。
小松委員	B	各館のコンセプトに沿った作品収集が順調に行われている点が評価できる。また、九博も開館から20年を経て、順調に収蔵品数を増やしている。
藤井委員	B	—

(2) 展覧事業

自己点検評価 A 委員会評価 A

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	魅力的な特別展が実施され、それぞれに工夫を感じられる点で評価できる。これらの展示の工夫はさらに必要でもあろう。
小笠原委員	A	特別展は、5つ観覧したが、どれも素晴らしく、特に東博の「はにわ」と奈良博の「空海」は圧巻だった。満足度調査結果は、80%前半と90%半ばに明らかに違いがあることは観覧しても理解できるので、かなり確からしさがあると思う。その意味で、90%超の満足度がある多くの展覧事業について、来館者数も考慮しても、極めて高く評価できる。
小松委員	A	各館ともコロナ禍以前の活況を取り戻しつつあるように見える。海外からの来観者が大幅に増加している点は、国を代表する博物館としてたいへんに意義深いことであり、引き続き充実した対応を行っていく必要があるだろう。
藤井委員	A	先述したが、「パリ・ノートルダム大聖堂展」では、実物を一切移動させず、デジタル情報だけで構成されていた。このような展示を企画してみてもよい時期ではないだろうか。一度作れば、HPなどでも公開することができる。

(3) 教育・普及活動

自己点検評価 B 委員会評価 B

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	講演会やワークショップ等、努力がみられる。さらに未来を見据えた若者への対応についての努力も期待する。
小笠原委員	B	自己評価、専門部会評価に準じる。正倉院の新しいウェブサイトは、奈良博の新しいデータベース公開として10年ぶりのことで、沢山のアクセスがあった。
小松委員	B	各館とも引き続き教育・普及活動に注力しているようすがうかがえる。また、東博において博物館支援者増加への取り組みが大きな成果をあげている点も注目される。
藤井委員	B	—

(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
自己点検評価 B 委員会評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	各館の展覧会に即した研究、事業、調査研究が着実に実施されていると判断できる。
小笠原委員	A	展覧会や収蔵品に即した調査研究がなされているからこそその展覧事業の充実がある。「フシギ日本のかみさまのびじゅつ」は、「ほとけ～」に続き、教育普及の視点から様々な工夫が取り入れられ、大人でも十分楽しめるもので、秀逸であった。
小松委員	B	—
藤井委員	B	—

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価 A 委員会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	国内外への展示活動に対してのさまざまな協力について高く評価できる。
小笠原委員	A	自己評価、専門部会評価に準じる。奈良博の専門的・技術的な援助・助言は顕著だったと思われる。
小松委員	A	東博が世界各地の展示施設と MOU を締結したことは、これまでにない試みであり、今後の進展が注目される。
藤井委員	A	—

(6) 文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組		
自己点検評価 B 委員会評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	文化財に親しむためのデジタルコンテンツの利用等に積極的に取り組み実施していることから目的を果たしていると思われる。
小笠原委員	B	自己評価、専門部会評価に準じる。
小松委員	B	—
藤井委員	B	—

〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 A 委員会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	外部からの依頼への対応や、過去の発掘や研究成果等を広く発進するなど着実に目標端正に成果を上げていると判断できる。
小笠原委員	A	自己評価、専門部会評価に準じる。奈文研の平城宮・京跡の発掘調査や聖武天皇の木簡等は特に評価できると考える。

小松委員	A	我が国の文化財について、広く海外に情報発信をする試みがなされ、成功を収めているようにみえる。
藤井委員	A	—

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

自己点検評価 A 委員会評価 A

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	新しい技術の開発や継続的な研究結果を着実に積み上げていると判断できる。
小笠原委員	A	自己評価、専門部会評価に準じる。
小松委員	A	文化財の保護についての科学的アプローチはたいへん重要な視点であり、今後さらなる研究の進展が期待される。
藤井委員	A	—

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

自己点検評価 A 委員会評価 A

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	アジア太平洋地域の無形文化遺産の保護に関する研究やさまざまな国との交流を通し、確実な成果を上げていると判断できる。
小笠原委員	B	S評価がなく、B評価が圧倒的であることを集積すると前年度と同評価のBとせざるを得ないと思料した。SDGs 11・4に沿った無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する調査研究など国際協働を堅実にいった。
小松委員	A	—
藤井委員	A	—

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

自己点検評価 A 委員会評価 A

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	文化財に関するさまざまな情報をデジタル化やその整理、利用法などに努力が感じられる。ウェブデータベースへのアクセス数も増加するなど着実に成果を上げていると判断できる。
小笠原委員	A	データベースへのアクセス件数の伸びや展示公開施設の充実もあり、自己評価、専門部会評価に準じる。
小松委員	A	東文研においてさまざまなデータベースが構築されつつある点はおおいに評価できる。今後、さらなる充実を期待したい。
藤井委員	A	—

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

自己点検評価 A 委員会評価 A

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	地方公共団体に対する協力のニーズが増えている中で地道に対応していることが理解できる。
小笠原委員	A	文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力で所期の目標を上回る成果が得られている。
小松委員	A	—

藤井委員	A	—
------	---	---

<b>(6) 文化財防災に関する取組</b>		
<b>自己点検評価 A 委員会評価 A</b>		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	能登半島地震ほか文化財救援活動の実施や、さまざまなシンポジウム、講演会、研修集会など、活発に活動しており、評価できる。
小笠原委員	A	—
小松委員	A	—
藤井委員	A	—

<b>〔法人共通業務〕</b>		
<b>II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</b>		
<b>自己点検評価 B 委員会評価 B</b>		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	東京国立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所の組織体制の見直しを評価したい。ただし今後の活動も重要である。
小笠原委員	B	一般管理費等の削減について、地道な成果を上げている。
小松委員	B	各館、各研究所とも、限られたマンパワーをいかに活かしていくか、さまざまな試みをおこなって、一定の成果をあげているようにみえる。
藤井委員	B	—

<b>III 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置</b>		
<b>自己点検評価 B 委員会評価 B</b>		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	展示事業等収入において、増加が見られ喜ばしいが、特に平常展での増加が特徴的で、良い方向である。インバウンドの影響があるかと思うが、平常展の充実は今後も持続してほしい。
小笠原委員	A	自己収入は、前期比7億増の29.5億円、外部資金の獲得も寄付金で3.5億円増の14.3億円、受託研究費も0.7億円増の8.6億円と大きな成果を上げている。赤字になったが、人件費の高騰に価格転嫁が自己収入でも追いつかなかったためである。
小松委員	B	コロナ禍が終息して以降、各館とも入場料収入が順調な伸びをみせているようにみえる。また、外部資金の導入は重要な課題であり、引き続き力を入れていく必要があるだろう。
藤井委員	B	—

<b>IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画</b>		
<b>自己点検評価 B 委員会評価 B</b>		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	外部からの資金が増える傾向があり、一時は良いが、継続できる安定した資金獲得体制が生まれることが望ましいであろう。また、職員については、業務の効率化を考えながら常勤者を少なくとも成り立つ方向を考えているが、さまざまな障害の起きない工夫もつねに考えてほしい。

小笠原委員	B	自己評価に準じる。
小松委員	B	—
藤井委員	B	—

V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価 B 委員会評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名見耶 委員長	B	これからの博物館を考えると、毎年のように述べているが、若年、青年層の博物館、文化財への理解を深める必要がある。少しずつ増えている若者への対応を充実させるためにも普及活動確保のための予算拡充は不可欠と思われる。若者を育てれば、およそ十年後には新しいファンとなるはずで、そこへの投資は最も効率的ではないかと思われる。
小笠原委員	B	情報セキュリティ管理や各施設の整備に努めているほか、ガバナンス体制維持やコンプライアンス遵守も適切に行っている。
小松委員	B	—
藤井委員	B	—

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
名見耶 委員長	報告等から判断して、概ね目標を達成していることが確認できる。今後も継続した努力を望みたい。また、近年のインバウンドによる観客への対応にもさまざまな配慮対応を期待したい。
小笠原委員	博物館業務及び研究所・センター業務は、ともに内容が充実したうえ、内外に大きなインパクトを与えたものと考え。 博物館業務については、来館者数の伸びにより、入場料収入が大幅に増加した。また特別展に関しても来館者数の伸びだけでなく、満足度調査も90%以上の高率を維持している。人件費の一律的な上昇を価格転嫁できずに今年度は赤字となっているが、今後の自己収入の更なる拡大に期待する。 研究所・センター業務も新たな知見の開拓につながる基礎的・探究的な調査研究や科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基礎的な研究などにおいて大きな成果が得られた。 国家戦略上も文化の維持・発展は重要であると思われ、当機構の果たす役割は大変大きく、期待も高い。キティ展などの新しい試みもみられ、今後も世界的にも唯一無二の有形・無形文化財の集積拠点となるよう更なる精進をお願いしたい。
小松委員	各館、各研究所とも、限られたマンパワー、限られた予算のなかで精一杯の努力を重ねていると評価することができる。とくに、コロナ禍が終熄して以降、入館者数が順調な伸びをみせているのはたいへん明るい材料といえる。また、今後はこの業界でもさらにグローバル化が進んでいくとみられ、海外の文化施設との連携、海外からの来観者に対するより充実した対応などが求められていくことになるだろう。
藤井委員	全体として確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。博物館業務においては、展覧事業の自己評価がAで高く、他の多くがBであるが、これらの活動においても高く評価すべきところがあるので、次年度の自己評価がより高くなることを期待している。研究所・センター業務においては、全体として半数以上がAという自己評価であって、その自己評価は説得的であり、全体の充実ぶりを見ることができる。 今年二月に日本科学未来館で開催の「パリ・ノートルダム大聖堂展」を拝見した。ノートルダム大聖堂の被災、再建の全貌をデジタル情報で立体的に示す、という展示方法も先端的であったが、驚いたのは入場者の平均年齢が30才くらいで、20代とみられる若者で溢れていたことである。「文化財保存」という視点の展示が、会場を変えると、若年層の大量集客が可能ということなのだろうか。国立文化財機構内部においても、この展覧会は話題にならなかったようだから、関連事業への目配りの狭さには、驚くべきものがある。これを契機に、情報共有の仕組みを拡大する方向で考えてみたらどうか。文科省の内部における役割分担を越えて、有益な情報を相互に有効に流通させるべきだ。若年層を国立博物館に呼び寄せる方策の一つになるかもしれない。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（博物館部会）

自己点検評価 B 部会評価 B

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価 B 部会評価 B		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	—
出川 副部会長	B	各館に所蔵される文化財の修理及びその報告書が刊行され、また収集活動においても、東博の浮世絵コレクションの一括受け入れや中国書画の継続受け入れなど、購入以外でも館蔵品の充実が目覚ましい。
大久保 委員	A	指定文化財をはじめ貴重な美術作品の収集が継続的におこなっているだけでなく、東博への 1000 点を超える著名な広重の錦絵コレクションなど、寄贈受け入れも注目され、今後の研究や展覧会への活用が大いに期待される。
笠原委員	A	各施設が工夫を凝らして作品購入・寄贈寄託を実施し、国の文化財を充実させた。また、災害地域に積極的に出向き、文化財レスキューを他団体と協力して行った。
平井委員	B	収集並びに修復等に関する堅調な取り組みを評価したい。また、資料のデジタル化も着実に進められている。資料のデジタル化は重要な取り組みでもあるので、今後は件数等の他にその計画（ロードマップ等）も示してほしい。

(2) 展覧事業		
自己点検評価 A 部会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	A	—
出川 副部会長	A	奈良博の特別展「空海 KOUKAI」展や東博の特別展「はにわ」展は展示内容において、極めて充実していた。また東博での特別企画「内藤礼」展は現代美術を展示するとともに、館蔵品の古美術の魅力も引き出すことのできる、意欲的な展覧会で大変好感をもてた。欧米の博物館ではすでに現代美術が古美術と同じ空間で展示されることもおおくあり、このような展覧会は現代美術の若いファンを博物館に取り込む意味でも是非続けてほしい。
大久保 委員	A	国立博物館らしい規模と水準の展覧会が実施できており、観覧者数も期待を上回るものとなっている。寺院の悉皆調査にもとづく企画も学術的に有意義だが、京博「雪舟伝説」のようなテーマ設定の斬新な企画もすばらしかった。東博の「あそびばトーハク」など、観覧者の裾野を広げる上で面白い取り組みであった。これは教育・普及活動としての一面も評価できるのではないか。
笠原委員	B	各施設の学芸員の調査研究に基づく各博物館ならではの展覧会を実施したことは評価できるが、入場料およびグッズの販売収入だけを目当ての展覧会を実施することは国を代表する施設として一線を越えた。
平井委員	A	入館者数が全体的に緩やかな増加傾向にある。また展覧会の内容の工夫だけでなく観覧環境の整備や多様な来館者への配慮またはその他の附帯的なサービスにも努力が見られる点を高く評価したい。

<b>(3) 教育・普及活動</b>		
<b>自己点検評価 B 部会評価 B</b>		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	—
出川 副部会長	B	各館とも充実したワークショップや多数の講演会などを開催され、インバウンドむけにも配慮した活動など、所期の目標を達成していると思います。
大久保 委員	B	九博特集展示「モンゴル襲来の痕跡を探る」に合わせて専門家を集めてシンポジウムを実施した点など、教育・普及面のみならず、展示活動がさらなる研究の進展につながる可能性を提供するものとして評価できる。講演会やギャラリートークだけでなく、こうした取り組みも増やしていけるとすばらしい。
笠原委員	A	展覧会に合わせた事業だけでなく、常設展の教育普及活動も地味ながら多く実施し成果を挙げている。
平井委員	A	各館とも充実した教育・普及活動を展開していることに加え、賛助会員等の博物館支援者の開拓においても一定数の増加を実現している。どのような取り組みやアプローチが増加に寄与したのかを分析し、さらなる開拓を図ってほしい。

<b>(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究</b>		
<b>自己点検評価 B 部会評価 B</b>		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	—
出川 副部会長	B	特別展の図録の論文に反映されている研究成果のレベルの高さと、教育的配慮のある解説のわかりやすさなど、高く評価できます。九博の特集展示「人吉球磨の玉手箱」では地道な研究成果の波及効果も大きく、特集展示の在り方としてひとつの手本となるでしょう。博物館の研究員の学术交流や海外の博物館とのネットワークなど博物館の国際的なレベルを保つうえで、重要なことを実施されていると思います。
大久保 委員	B	外部資金の獲得状況に館によるばらつきがややあるように見られる。館の規模によって申請件数に多寡が生じるのはやむを得ないが、潤沢な研究資金確保のための努力を続けてほしい。
笠原委員	A	収集作品の調査研究に基づく展覧会や教育普及活動の実施など、国立博物館の使命ともいえる研究活動を実施しているが、国を代表する施設であるならば、その研究に専念できるだけの予算と体制を早急に措置されるべきである。
平井委員	A	それぞれの収蔵品や展覧会に即した充実した調査研究が展開されている。その中でも九州国立博物館の「あんしんガイド」は社会包摂の観点からも重要な取り組みであるといえる。このガイドの制作が(2)展覧事業におけるあんしんルームの設置につながったことが想定される。この成果を広く共有してほしい。

<b>(5) 国内外の博物館活動への寄与</b>		
<b>自己点検評価 A 部会評価 A</b>		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	A	—
出川 副部会長	A	他館への作品の貸与だけでなく、他館の要望に応じて助言や指導を行うなど所期の目標を上回る成果をあげていると思います。

大久保委員	A	自館の展示活動をおこないながら、国内外の館の展示活動に協力するのは苦労も多いが、うまくバランスがとれているように見受けられる。奈良博の石川県美「まるごと奈良博」のような取り組みは地域文化振興と国立博物館の普及活動の両面で高く評価できる。
笠原委員	A	積極的に海外美術館とネットワークを構築して、今後の活動に生かそうとしている。
平井委員	A	海外の博物館・美術館の交流ならび協力が積極的に行われていること、国内においても資料の貸与や助言にとどまらず、展覧会の特別協力まで展開している等、国立館としての役割を果たしていると評価できる。

**(6) 文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組**

自己点検評価 B		部会評価 B
委員名	委員評価	コメント
小松部会長	B	—
出川副部会長	B	デジタル技術を使った館蔵品の活用は博物館ではますます重要になってきています。所期の目標を達成しています。
大久保委員	B	ColBaseの充実が継続的にはかれており、学界や出版界などで高い認知度を得てきている。学術研究や美術普及に寄与するところがきわめて大きいので、今後も積極的に推進して行ってほしい。画像充実の速度をあげるため、撮影のための立ち合いに関しては、高度な取り扱いを要しないものなど、館内研究スタッフに頼らず実施できる体制も検討してはいかがか。
笠原委員	A	国内外の博物館への作品の貸出等に積極的に取り組んでいる。
平井委員	B	各館ともに施設の貸し出しをはじめとするユニークベニューの取り組みが保有資産の有効活用という観点から中心的となっているようだが、その事業がより豊かな博物館体験の創出や支援者の開拓ひいては経済の外部性等にどのような影響（相関）があるのか、より戦略的な展開が求められるのではないか。短期的には難しいとは思うので、ある程度の中長期的な時間軸で考察していく必要があるように感じる。

**その他（総合的な事項、自己点検評価について等）**

小松部会長	<p>コロナ禍が終熄して、各施設とも平常展、特別展の来観者数がようやく旧に復しつつあるのはたいへんに喜ばしいことと思う。展覧会は展示施設の日常業務の集大成というべきものであり、どんなに充実した内容の展覧会であっても、来観者数が少なければ画竜点睛を欠く感が否めない。今年度でいえば、東博の「大覚寺展」、奈良博の「空海展」などが、多くの来観者を集めており、展覧事業として成功を収めたものと評価することができる。また、各施設ともに教育普及事業の拡充に努めており、以前の状況を考えればまさに格段の進歩を遂げているといえる。来年度は三の丸尚蔵館が全面開館するが、教育普及事業についても、ぜひ注力していただきたいと思う。なお、会議の席上「この会議ではお金の話ばかり」という委員の意見があったが、展示施設における事業は、そのすべてが経費の裏付けがあって初めて実行に移せるものであり、資金の確保がすべての事業の前提となることは論をまたない。国からの運営費交付金に多くを期待できない現状で、事業費、研究費について、外部資金を導入する努力はきわめて重要であり、今後とも各施設においてさまざまな方策を探っていくていただきたいと思う。</p>
出川副部会長	<p>入館者総数にも反映されているように、魅力ある特別展や工夫を凝らした平常展など国立博物館としての活動は所期の目標が十分に達成されています。また表慶館の活用についても「キティ」展などで目覚ましい成果がみられます。海外の博物館との積極的な学術交流やネットワーク構築などによって、展覧会活動がよりレベルの高いものとなり、国際的に高い評価を得る博物館となってきています。また「内藤礼」のような現代美術を展示する意欲的な試みも、博物館ならではの鑑賞体験の多様化、来館者の拡大には重要な要素になると思います。</p>

大久保 委員	<p>展示・教育・普及など多方面に国立博物館らしい先端的で骨太な取り組みがおこなわれ、国内の他の館の活動への刺激となっている。ただ、それだけに研究スタッフの負担は大きいものとなっているはずで、研究面でも学界をリードできるよう、時間・予算など十分な配慮していただきたい。そのことが、将来的にも高水準の展示や収集活動を担保するものである。</p>
笠原委員	<p>作品の収集や保存・管理、調査など、国立博物館がすべきことを各館とも十分に実施している。また、国内外の博物館への作品貸出や、ネットワークの構築なども工夫しながら行っている。自主企画展も調査研究に基づく素晴らしい展覧会を実施している一方で、あまりにも国からの予算が少なく、博物館として一線を越えた「Kitty」展を実施するほど追い込まれている。国の文化度が如実に反映されるといわれる国立博物館が、賛助会員や協賛取得に追われている状況は、他国の国立博物館の予算措置を勘案しても、異常と言わざるを得ない。</p>
平井委員	<p>各館ともに堅実な取り組みを多方面にわたって展開し、着実な成果を上げていると評価できる。賛助会員やメンバーシップ（友の会等）、またキャンパスメンバー等の博物館支援者が全体で増加傾向にあることは、財政的な面だけではなく、各館の取り組みに対する理解・共感を得られたという面において重要なことである。その一方で、今後も博物館支援者を開拓していくにあたり、特典をはじめとする様々な点について現支援者及び潜在的な支援者に対してアンケートならびヒアリング調査を実施する必要も感じる。国立館として提供可能なサービス等を定期的に見直すことで、博物館支援者のより一層の拡充を図ってほしい。</p>

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（研究所・センター一部会）

自己点検評価 A 部会評価 A

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 A 部会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
藤井 部会長	A	確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。2112F には S 判定が付いているのだが、多くが外部自治体などからの依頼された仕事である。外部から依頼される仕事をすべて引き受けると、成果の量は大きくなるが、所員の負担が過剰となる場合があるので、注意するべきである。
児島 副部会長	A	北米美術図書館協会とのシンポジウムなど海外との活発な交流がみられた。黒田清輝没後 100 年のシンポジウムでは近年の黒田研究の成果を広く発信した。能登での無形文化財の調査は社会貢献としても意義深い。
木下委員	A	平城宮・京、藤原宮・京の発掘調査を通して都城の実態解明が進んだこと、石上遺跡ほかこれまでの調査報告書ならびに遺物・遺構に関する研究成果書を刊行したこと、聖武天皇の大嘗祭関係の木簡が発見されたこと、これらは新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究として高く評価できる。
栗本委員	A	幅広い課題で調査研究を進めるとともに、得られた成果の発信も積極的に進められている。所期の目標を上回る成果が得られている。
福岡委員	A	東文研・奈文研ともに充実した研究成果をだしており、その責任を十分に果たしている。特に奈文研の過去の調査研究が、令和 6 年度に国宝附追加指定、重要文化財指定及び重要伝統的建造物群保存地区選定へと結実したことは特筆に値する。

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価 A 部会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
藤井 部会長	A	確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。新技術の開発と普及は、文化財機構の重要なテーマであるので、さらに前進的に進めて欲しい。
児島 副部会長	A	《動植綵絵》に関する研究の web 公開は広く役立つ。継続的な光学調査も web 公開が望まれる。「歴史災害痕跡 DB」は広く国内各所で活用して防災に役立てたい。動植物由来の遺物の分析方法の開発には今後のさらなる可能性を期待する。
木下委員	A	奈文研によるリアルタイムフォトグラメトリ手法の確立は、基本業務の時間・コスト・業務量の削減を実現した点で、高く評価できる。この手法が文化財担当者研修などを通して、普及することを期待する。年輪年代学研究の進展、動物遺存体の分析による正倉院宝物の調査成果も重要である。
栗本委員	A	確実に研究活動を行っている。得られた成果は、研修会や共同研究などを通して活用されていることを理解した。所期の目標を上回る成果が得られている。
福岡委員	A	リアルタイムフォトグラメトリ手法や光学調査を始めとする調査分析の手法をアップデートし、研究の効率化につなげている点は高く評価できる。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価 A 部会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
藤井 部会長	A	確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。他の国際機関（ユネスコ・イコモスなど）との情報交換、情報共有を常に心がけて欲しい。
児島 副部会長	A	トルコ、クロアチア、カンボジア、と宗教や文化の異なる地域で現地の専門家と交流し文化遺産保護をおこなえたことは、日本の対外的な信用を高めることになり意義深い。ウクライナの専門家への研修はよき貢献になったと評価する。
木下委員	A	奈文研が長年取り組んできた西トップ寺院の修復が終了し、報告書の刊行に至ったことを喜びたい。ウズベキスタン、ウクライナ関係の受託事業、アジア太平洋無形文化遺産研究センターによる IRCI データベース改良、国際会議、セミナー開催等の地道な活動に敬意を表する。
栗本委員	B	国際協働としての調査研究や人材育成に着実な成果をあげているものと考ええる。 評価ルールに基づき評価が行われていることは理解しましたが、小項目における A 評価が全体の 3 割程度にとどまっている場合、中項目として A と判定することの妥当性について、根拠や判断の背景について説明を加えていただければ、納得感が得られるものと感じました。
福岡委員	A	カンボジアでの遺跡修復やアジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する研究フォーラムでの若手研究者育成など、日本が培ってきた技術や経験を生かした国際協働が進められている。今後、国立の機関群として、機構全体の経験を統合的に国際協働に生かす工夫が期待される。

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 部会評価 A		
委員名	委員評価	コメント
藤井 部会長	A	確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。 デジタル情報に関しては、①デジタル情報の制作、②その恩取り扱い方法、③再現性の永久性の確保、④保存方法の開発、など、現在では未解決の課題がいくつもあるので、特に③④について、その見通し・方法を、文化財機構で開発して欲しい
児島 副部会長	A	文化財情報の DB は都道府県別に分類されて論文などの資料が簡単に検索できる。奈良での展示公開活動は成果をあげている。東京での美術研究の発信手段は限られているが、近年『美術研究』で扱う内容を広げ、有効に活用されていると判断する。
木下委員	A	出土木簡が聖武天皇の大嘗祭に関係するものであることにいち早く認め、迅速に処理・整理・公開し、即位 1300 年に合わせた企画展を開催したことを高く評価する。東文研の資料閲覧室ウェブサイトが全面的に更新され、多くのアクセス数に繋がったことは喜ばしい成果である。
栗本委員	A	データベースの充実と公開、刊行物の刊行、展示施設の活用などを通して所期の目標を上回る成果が得られている。次期中期計画では、研究成果のオープンアクセス化と同時に、長期的にデータを維持・管理することにも注意を払う必要があると考える。
福岡委員	A	文化財情報研究室が学会賞を受賞するなど、情報整備が高く評価されている。文化財データリポジトリの公開など、蓄積された情報の公開にも積極的に取り組んでいること、XR 技術の連携研究協定を結ぶなど、新技術への対応も図られていることが評価できる。

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
自己点検評価 A		部会評価 A
委員名	委員評価	コメント
藤井 部会長	A	確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。第一次大極殿院の整備事業については、大極殿の時と同様に、建築復元作業の経過を克明に記した。報告書、研究会記録を刊行するように、国交省を指導して欲しい。事業が長期に亘るので、事業全体の終了後の開始では遅い。
児島 副部会長	A	各所へ適切に助言をおこない、十分な活動をおこなっている。国交省のプロジェクトのように臨時のもの以外は大きな成果を示しにくく自己評価で B 評価が多いが、日常的、継続的に期待される使命を果たしており、地道な活動は A 評価に値する。
木下委員	A	災害時を想定した文化財の保存・整備や被災した石垣の修復にかんする知識への需要が以前より多くなっており、これに対応した研修が継続していることは奈文研の存在意義を高めている。研修成果の活用度、研修の満足度ともに高い数値が得られていることを高く評価する。
栗本委員	A	専門知識と経験を活かした地方公共団体等への助言や協力、専門職の研修、大学教育などを通して、所期の目標は十分に達成しているものと考ええる。
福岡委員	A	文化財担当者研修や地方公共団体等への協力へのニーズは高く、その要望に十分応える活動がおこなわれている。

(6) 文化財防災に関する取組		
自己点検評価 A		部会評価 A
委員名	委員評価	コメント
藤井 部会長	A	確かに事業が進んだと思われる。高く評価したい。今回は能登地震が起きたのであるが、災害は毎回異なった課題を要求するので、それに柔軟に対応できるような仕組みの開発を心掛けて欲しい。
児島 副部会長	A	少ない人員で迅速な活動をおこない成果をあげてきた。危機管理マニュアルの公開や被災情報の DB の開発やアーカイブなど今後ますます重要になる活動である。
木下委員	A	創設以来、段階的に構築してきた地域防災体制が、能登半島地震において効果的に機能し、地元と中央、組織間の連携を実現させていることを高く評価したい。今後必要に応じた事業の量と種類が増えることが予想されるが、不時に備えた柔軟な業務計画をたてることも一方では求められるのではないだろうか。
栗本委員	A	地域防災体制の構築や災害時ガイドラインの策定など、これまでに着実な成果が得られている。今後は、災害発生地域自らが主体となって文化財防災活動を継続・発展させていけるような、自律的な仕組みへの助言も期待する。
福岡委員	A	文化財防災センターがイニシアティブをとり、文化財レスキュー事業等を進めたことは高く評価できる。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
藤井 部会長		全体として、順調に事業が進んだと認められる。高く評価したい。あらゆる局面において、現場の調査、記録化、処置、から、調査・研究を経て、論文、報告書、デジタル情報化などで公開、という経過をとる。その一連の流れと、幅広い全体事業を、意識的に全体視して、研究所の運営を進めて欲しい。また、国の事業において特に必要なことを、意図的に取り上げ、集中的に検討することも重要や役割であると、強く意識して欲しい。
児島 副部会長		近年取り組んできたデジタル技術の推進や国際交流などの試みが各担当の研究活動の中に定着し、その積み重ねによって自然と活性化し、外部の関心や評価を呼び込む結果となっている。そのことが A や S 評価につながったと考える。黒田没後 100 年はもう少し予算をかけて記念イベントができるとよかった。
木下委員		増加する傾向にある多方面の業務のすべてに対して相応の成果を出していることに敬意を表します。奈文研では様々な受託事業が進められていますが、研究所の存在理由の一

	つである都城研究を先端的に進める組織として、理論を含めたさらなる研究の重点化と、その成果の社会への「見える化」を期待しています。委託研究については少し整理する選択肢を設けることはできないでしょうか。
栗本委員	全体として、調査研究および成果の公開、各種相談業務、専門職の研修、人材育成（国内外を含む）、情報発信、文化財防災など、多岐にわたる事業が活発に展開されており、当初の目標を上回る成果が得られていると評価します。
福岡委員	各機関とも、そのミッションに即して高いレベルで調査研究活動が進められていることがよくわかった。災害対応のような実践的な活動、新しい技術を取り入れた調査研究方法の開発、文化財情報の収集と公開、国際協力など、多岐にわたる活動を、今後も機構全体としてバランスをとりながら進めていくことが期待される。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

委員長	名見耶 明	(筆の里工房副館長)
副委員長	小松 大秀	(公益財団法人永青文庫館長)
委員	大久保 純一	(町田市立国際版画美術館長)
委員	小笠原 直	(監査法人アヴァンティア法人代表 CEO 代表社員 公認会計士)
委員	笠原 美智子	(長野県立美術館館長)
委員	木下 尚子	(熊本大学名誉教授)
委員	栗本 康司	(秋田県立大学木材高度加工研究所教授)
委員	児島 薫	(実践女子大学文学部美学美術史学科教授)
委員	出川 哲朗	(大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長、大阪大学招聘教授)
委員	平井 宏典	(和光大学経済経営学部経営学科教授)
委員	福岡 正太	(国立民族学博物館副館長)
委員	藤井 恵介	(東京大学名誉教授)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 博物館部会

- 部会長 小 松 大 秀 (永青文庫館長)
- 副部会長 出 川 哲 朗 (大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長、大阪大学招聘教授)
- 委員 大久保 純 一 (町田市立国際版画美術館長)
- 委員 笠 原 美 智 子 (長野県立美術館館長)
- 委員 平 井 宏 典 (和光大学経済経営学部経営学科教授)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 研究所・センター部会

- 部会長 藤 井 恵 介 (東京大学名誉教授)
- 副部会長 児 島 薫 (実践女子大学文学部美学美術史学科教授)
- 委員 木 下 尚 子 (熊本大学名誉教授)
- 委員 栗 本 康 司 (秋田県立大学木材高度加工研究所教授)
- 委員 福 岡 正 太 (国立民族学博物館副館長)